

グラフェンにおける カイラル対称性

東京大学 理学研究科 青木研究室
講義資料「グラフェンの物理」より

青木秀夫、初貝安弘

京都大学 M1 松田英史

参考

▪

http://cms.phys.s.utokyo.ac.jp/pdf/HatsugaiAoki_SSP2010.pdf

初貝安弘、青木秀夫

• ABSENCE OF NEUTRINOS ON A LATTICE

(I).Proof by homotopy theory

M.NIELSEN、M.NINOMIYA

motivation

グラフェンの物理では

$$\{H, \sigma_3\} = 0$$

がカイラル対称性と呼ばれている！

場の理論のカイラル対称性とどういったanalogyがあるのか？

Introduction

格子理論について
よく知られていること

カイラル対称性

→1st Brillouin Zoneから異なるchirality
のmassless fermion

(二宮・ニールセンの定理)

topologicallyに守られている！



同様に、カイラル対称性を持つグラフェンの理論においては
1st BZから異なるchiralityのmassless fermionが2つ出てくるこ
とがtopologicallyに守られているがそれを示す

<setting>

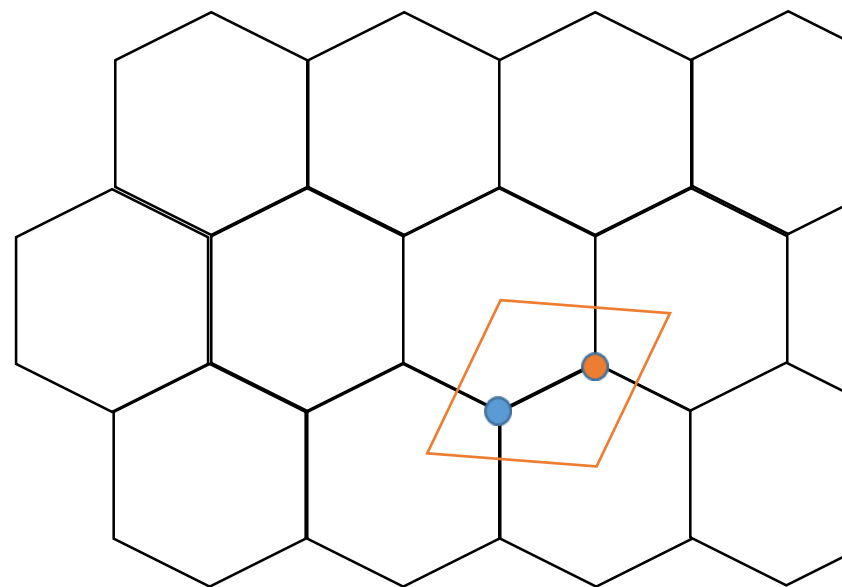
- ハニカム格子

六角形

単位胞あたり2電子

2+1次元

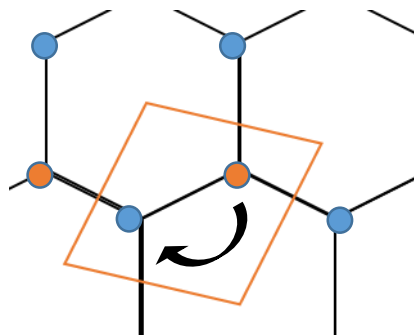
- tight-binding模型
- 第一近接原子への飛び移りのみ考える
- spinは考慮しない



<Hamiltonian>

$$H = t \sum_{\vec{x}} [\{c_{\alpha}^{\dagger}(\vec{x})c_{\beta}(\vec{x}) + c_{\alpha}^{\dagger}(\vec{x} + \vec{e}_1)c_{\beta}(\vec{x}) + c_{\alpha}^{\dagger}(\vec{x} + \vec{e}_2)c_{\beta}(\vec{x})\} + \{\alpha \longleftrightarrow \beta\}]$$

● : α
● : β



\vec{e}_1, \vec{e}_2 : 単位胞の位置を指定するための単位ベクトル

\vec{x} : 単位胞の位置ベクトル

波数表示すると

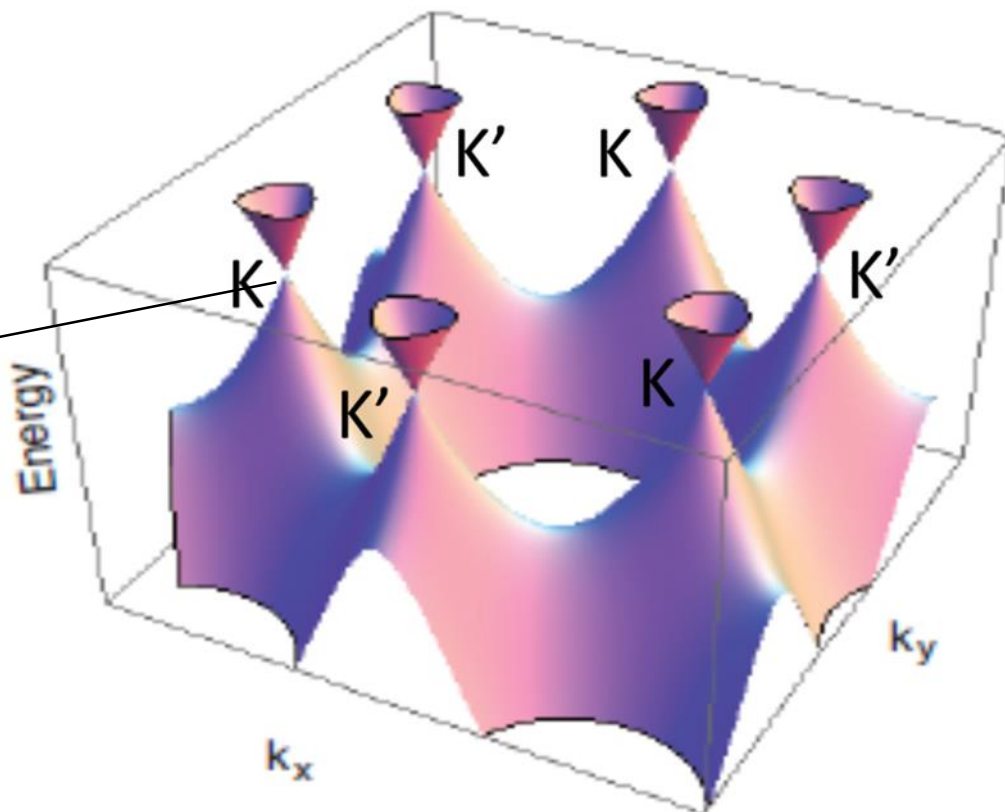
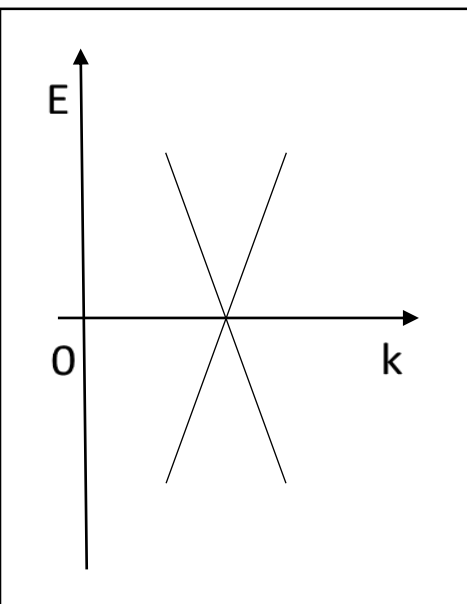
$$\begin{aligned} H &= \sum_{\vec{k}}^{1stBZ} [c_{\alpha}^{\dagger}(\vec{k})c_{\beta}(\vec{k}) + c_{\beta}^{\dagger}(\vec{k})c_{\alpha}(\vec{k})] \cdot [1 + e^{-i\vec{k}\vec{k}_1} + e^{-i\vec{k}\vec{k}_2}] \\ &= \sum_{\vec{k}}^{1stBZ} \begin{bmatrix} c_{\alpha}^{\dagger}(\vec{k}) & c_{\beta}^{\dagger}(\vec{k}) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 0 & D(\vec{k}) \\ D^*(\vec{k}) & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} c_{\alpha}(\vec{k}) \\ c_{\beta}(\vec{k}) \end{bmatrix} \\ D(\vec{k}) &= t(1 + e^{-i\vec{k}\vec{k}_1} + e^{-i\vec{k}\vec{k}_2}) \qquad \qquad \qquad = H(\vec{k}) \end{aligned}$$

$H(\vec{k})$ はtracelessかつ σ_3 と反可換(カイラル対称性)

- traceless: band gap中央にエネルギーの原点をとった
- σ_3 と反可換(カイラル対称性): 最近接格子間の飛び移り積分しか考慮していない

＜グラフェンのエネルギー分散＞

1stBZ 内の点K、K' においてBand gapは閉じている



< band gapの閉じている点(K、K') 近傍の電子は

massless fermionの分散を持つ>

ハミルトニアンを点K、K'のまわりで運動量の1次まで展開する

$$H \sim \sum_{i=1,2} [(X_i \sigma_i) \delta k_x + (Y_i \sigma_i) \delta k_y]$$

座標変換を行う $\kappa_i = V_{ij} \delta k_j$, $V = \begin{bmatrix} X_1 & Y_1 \\ X_2 & Y_2 \end{bmatrix}$

$$H = \sum_{i=1,2} \kappa_i \sigma_i$$

運動量(κ_1, κ_2)を持つmassless fermionの分散とみなすことができる。

カイラル対称性が存在する



- ・縮退点があるならば必ず2つ存在する(点 K 、 K')
- ・それぞれの縮退点から出てくるmassless fermionは異なるchiralityを持つ

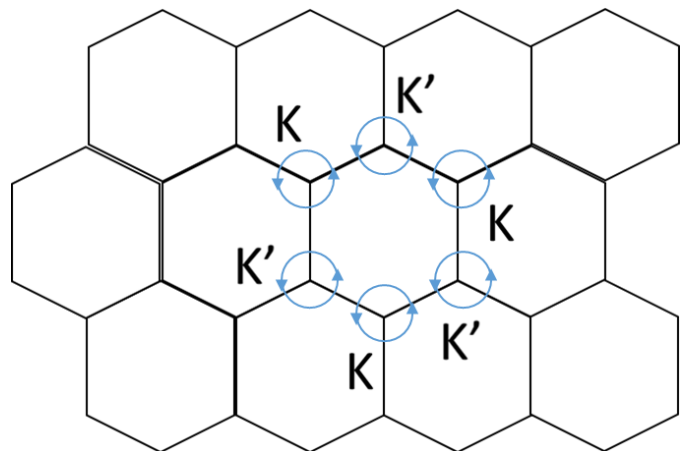
以下では、この関係がtopologicalに守られていることを示す

<chirality>

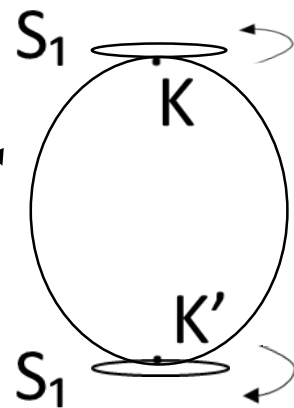
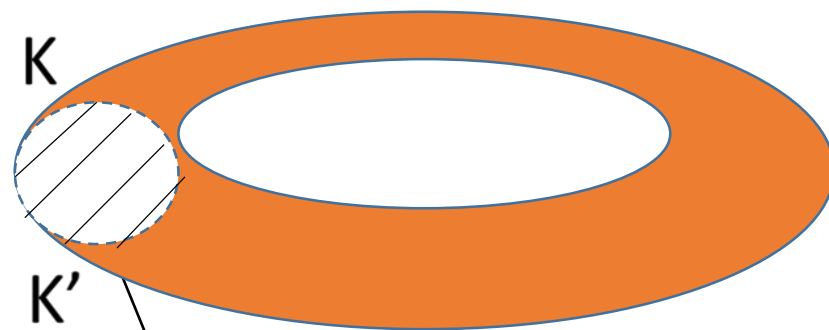
基底変換の行列 V の行列式が正負の時をそれぞれchirality +1, -1と定義する
(変換前の座標系の向きと同じ、逆に対応)

$$\det V = X_1 Y_2 - Y_1 X_2 \quad \left[\begin{array}{ll} > 0 & \text{(chirality+1)} \\ < 0 & \text{(chirality-1)} \end{array} \right.$$

K, K' 点のまわりを囲む微小な S_1 を考える $S_1 = \{\vec{\delta k} \mid |\vec{\delta k}| = \epsilon\}$
 周期性より 1st BZ はトーラスと同相である

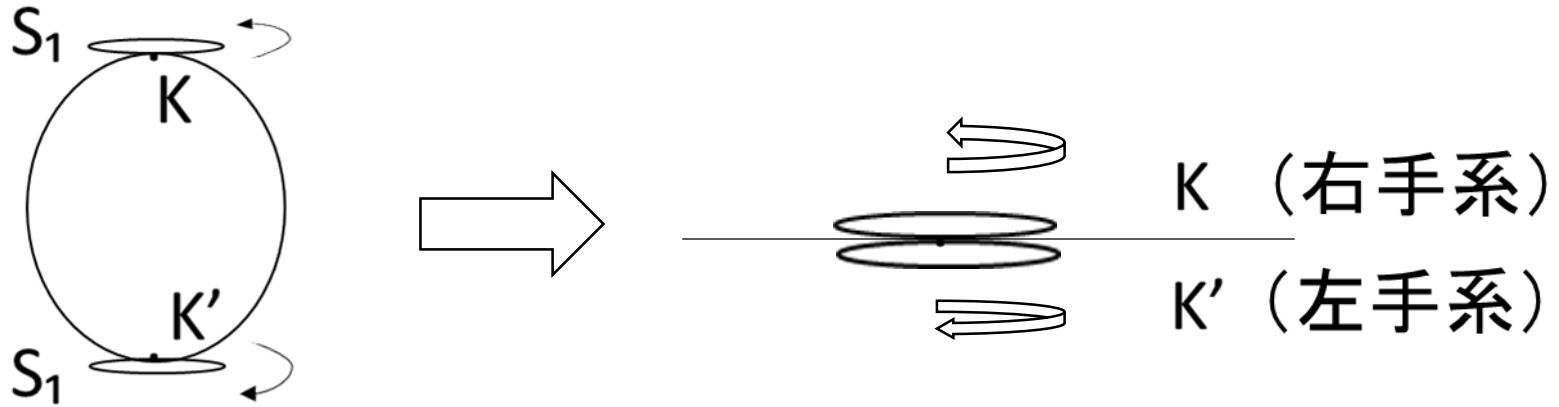


\sim



トーラスの断面

1stBZ(トーラス)は写像 $a_1(\vec{k})$ 、 $a_2(\vec{k})$ で二次元平面に射影される
 ($H(\vec{k}) = \sum_{i=1,2} a_i(\vec{k})\sigma_i$ とかけることを思い出す)



2次元空間における S_1 の写像は異なる向きを持つ座標系を成す
 →点 K, K' から出てくるmassless fermionは異なるchiralityを持つ

Conclusion

グラフェンにおいてカイラル対称性 ($\{H, \sigma_3\} = 0$)
があるならばBZから異なるchiralityを持ったmassless fermionが
一つずつ出てくることはtopologicalに守られている

この関係は格子上の場の理論におけるカイラル対称性とmassless
ferimionの関係と同様である